

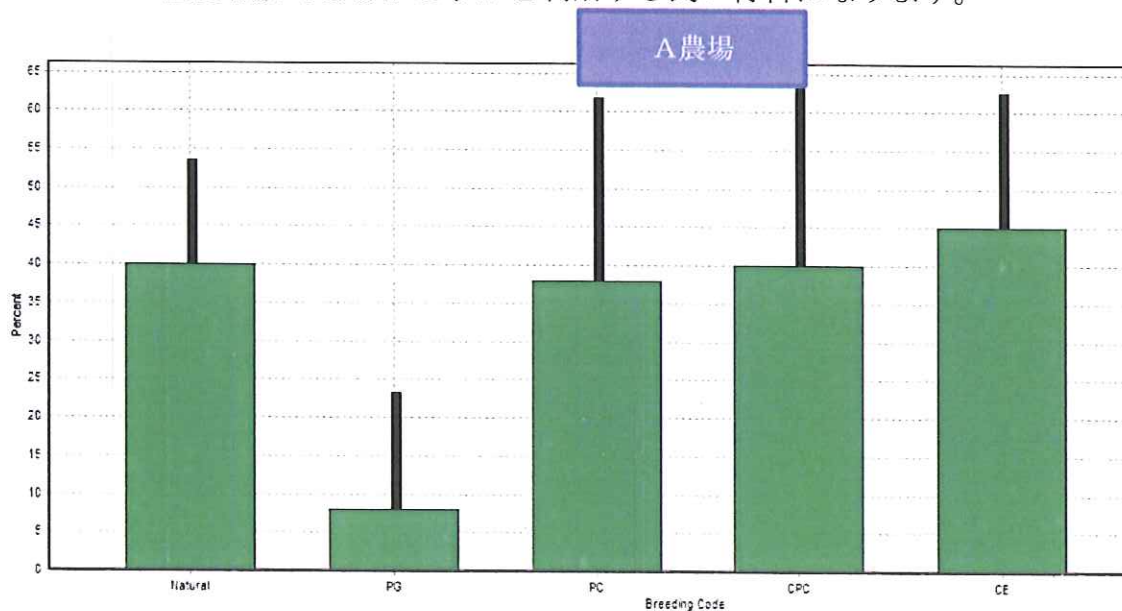
マネージメント情報 2012年 2月

1. 繁殖管理におけるホルモン処置とその受胎率について

繁殖管理を行う中で、大変に重要な要素の一つが、授精と授精の間隔をいかに短くするかということがあります（スムーズな再授精）。授精間隔は、発情間隔がベースになるので、昨今の発情間隔の延長など難しいことを抜きにして考えれば、そのパーフェクトワールドでは、21日間隔ということになります。一般の農場での発情間隔は様々ですが、腔胎日数の少ない農場での発情間隔は30日前後になっています。これは、発情をよく観察している証です。長い農場になるとこれが40日-45日にもなってしまいます。これではなかなか、腔胎日数：分娩間隔を短縮することが難しくなります。それを何とか補助しようということで、ホルモン処置による発情誘起と授精が行われることとなります。

このホルモン処置によってよりスムーズな再授精と授精間隔の短縮によって腔胎日数の短縮をめざしますが、このホルモン処置がどの程度の受胎率があるかを常に見ておく必要があります。

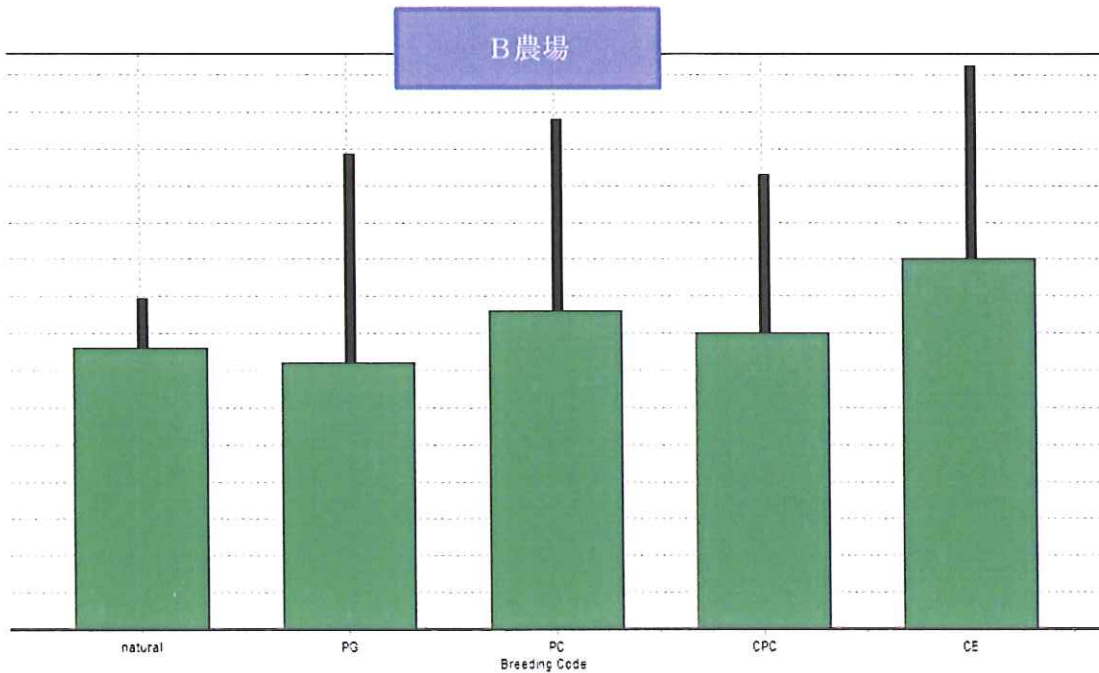
このホルモン処置牛の授精受胎率のモニターによって、その処置が当該農場になにがどの程度有効であるかどうかを判断する良い材料になります。

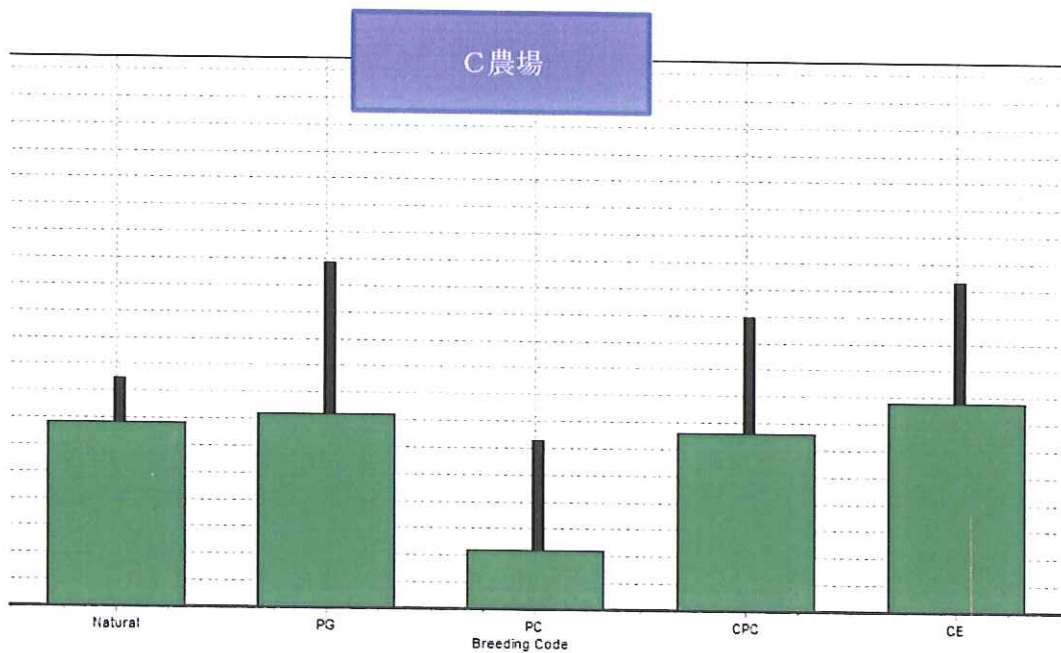


これまでのモニターによって、感じることはそれらのホルモン処置がおおよそ正しいタイミングで行われているなら全体の処置平均受胎率は、その農場の自然発情授精とほぼ同等になるということです。上記の内訳は左から Natural（自然発情授精受胎率）PG（PGの単味投与）、PC（ショートシンク：PG投与後

2日後 GnRH, 3日目授精)、CPC (オブシンク : GnRH 投与後7日目でPG, 9日目でGnRH, 10日目授精)、CE (シダーオブシンク : オブシンク+シダー挿入)

です。それぞれの処置をどう区別して使用しているかについては、自分なりの判断(文献+経験)基準があります。それを論じるととてもなぐくなりますし、それが絶対的に正しいというわけでもないでしょうから今回は紹介しませんが、図のように、その処置がその農場の自然発情での受胎率と遜色ないことが重要かと考えています。もう少し挑戦的にいうなら自然発情受胎率よりむしろ良い結果がでるのではないかと考えています。なぜなら、卵胞の大きさを超音波で判断し、卵胞波をコントロールし(オブシンク、シダーシンク)、排卵(時間)までコントロールしているわけですから・・・そして、この成績はその農場の自然発情受胎率を基準にそれぞれの農場のなかでまず、比較されるべきかと思えます。そうした意味から、こういうモニターが酪農家と獣医師双方に必要かつ重要かと考えます。お金をかけて授精した結果が、その農場の自然発情受胎率と同等以上の受胎率が出ているとすれば、それは相当に投資効果が高いことになると思えます。





このいくつかの図では、PGとPCにむらが見られますが、そうでない農場もあります。処置全体として自然発情との比較が大事なかなと思います。

*ある繁殖検診農場の奥さんは、次の検診日程を決めると必ずカレンダーを見て、「あ一次の検診は仏滅だー」とその時点ですでにがっかりします。先日は「お一先勝だー」と言っていました。

*ある農場の4代目（保育園生：今年小学校1年になります）は、酪農や農業が大好きです。牛舎にいるのが好き、トラクターに乗るのが大好き、畑仕事が好きです。大雪の日に農場に行くと脚立に乗って、車に積もった雪おろしで朝から真っ白になっていました。いつか家のテーブルの真ん中に不思議な紙で作った筒のようなものが1mくらいの高さに突っ立っていてその先が少し曲がったものがありました。その4代目が作ったスラリータンクのホースだそうです。私はそのスラリータンクのホースのところで食事をいただきました。

*この春から3戸の農場で、娘さんがお婿さんを連れて農場にもどってくることになりました。小学生のころからよく知っているかわいい御嬢さんが、結婚するのは、いまさら月日の経過を思い知らされます。それでも、すでに一戸の農場で、この極寒のなか活動を開始しました。私どもは若旦那と呼んでいます。未熟でも若い力は、周りに大きな活力を与えてくれます。